新島襄先生永眠百周年記念講演会

私の考える日本文化

司馬遼太郎

きょうは同志社大学で講演をせよということでありまして、同志社にはたくさんいい先生がいらつしゃいますが、考古学の森浩一先生はたいへんすぐれた学者であります。迎えに来てくださいまして、私は実をいうと、同志社大学にいくまでのあいだに講演の内容を考えておこうと思ったのですが、車のなかで森先生の古代の話を伺っていて、考える余地がなかったわけです。それでここに坐っておるわけであります。

私はいま総長先生と同じ歳だそうです。戦後二十三歳か四歳かで新聞社に勤めまして、昭和二十年代、私のはたち時代のころは、京都に行って大学を受け持てということで、満六年間、毎日大学のキャンパスにかよっておりましたのです。京都は大学のまちでありますので、京都大学のように、明治四十年前後に整備された大学はたいへん学部が多いので、一週間のうちほとんどは京都大学にいましたが、一週間か二週間に一度は同志社大学に行くことが楽しみでした。その明るいという感じはどこの大学にもない明るさでした。ですから、自分の精神衛生にひじょうによくて、同志社大学に行くのが楽しみでした。

車のなかで事務局の岡部さんに伺ったのですが、やがてその名前が思い出されてきて、田中さんという方が事務局におられました。その人が事務局の顔のような感じで、同志社ボーイであって、四十代ぐらいの歳で、昔の

映画俳優でダンスのうまかったビング・クロスビーという人に似た感じの人で、ハイカラな、二世のような感じでした。縁なしの眼鏡をかけていらっしゃったと思うのですけれども、私の顔を見ると、「ご機嫌さん」とこうおっしゃるのです。ちょうどお公家さんとか学習院のあいさつ言葉みたいな、それにふさわしい感じの品のいい人でした。ちょっと人を小ばかにしたような、そういう感じの人でした。同志社が好きで好きでたまらないという感じの人で、昭和二十年代のその時期は、学生運動がだいぶ燃え上がろうとしている時期であって、同志社はいかがですかといったら、同志社は赤くなる人はいますけれども、スクール・カラーがえび茶ですから、えび茶程度にすぎません、あるいはえび茶程度ですと。ほう、同志社にはスクール・カラーがあるのか、その後同志社の卒業生を見ると、君のところのスクール・カラーは何だといったら、やっぱり五人に三人くらいはえび茶色だといって教えてくれました。

当時、アーモスト館がたいへんいい感じの建物で、日本中が焼跡であります。そして掘立小屋のような新しい建物が建ちはじめていましたけれども、古いよき時代のしっかりしたいい感じのデザインの建物というのはアーモスト館でした。そのアーモスト館を見るということも気分のいい感じでした。もうすでに有名なオーテス・ケーリ先生は赴任していらっしゃって、オーテス・ケーリ先生は私より二つほど年上でいらっしゃるか、同じ年か、ちょっと自信がないのですけれども、オーテス・ケーリ先生はアメリカ軍で、私は日本軍で、たしか同期だと思うのですが、オーテス・ケーリ先生が赴任していらっしゃって、ちょうど新婚家庭のような雰囲気がありました。そのアーモスト館の下が大学の事務局でした。そこにいま申し上げた「ご機嫌さん」という田中さんがいらっしゃいました。

もう一人――これはつまらない話から始めているのは、しゃべるべきことを考えているところであります。ひょっとしたらつまらない話でなくて、これがいちばんいい話かもわかりませんが、河田さんという女性の方がいらっしゃいました。私より年上で、すでに三十代の感じで、ひじょうに知的な感じの、むろん彼女は同志社女専の出身でいらっしゃったと思いますが、いまの同志社女子大学の出身であります。戦前だったかに大阪に、いま市立大学という名前になっていますが、大阪商科大学という大学があって、そこに河田嗣郎先生という方が名学長でいらっしゃいました。その河田嗣郎先生のお嬢さんだということを聞いていました。

なにか話によると――こんなところでしゃべるべきことじゃありませんが、その話がその女性にとってはひじょうに名誉の勲章のような感じがしてうれしかったものですから、いま思い出してしゃべるのですが、戦争中でしたか、東京の帝国ホテルで盛大な結婚式があって、おそらく彼女には親のきめたお婿さんが気に入らなかったのでしょうね。花嫁衣装で坐ってしばらく考えて、今しか脱出する機会がない、結婚式が終わればお嫁さんですから、その場で脱走された方で、結局脱走して、どうしようといって相談に行くところはやっぱり同志社だったようであります。同志社大学、つまり女専に戻られて、先生に、どなたか知りませんけれどもご相談になったら、うちの事務局にいなさいと。ちょうど駆け込み寺とか、中世の教会のような役目を彼女にとっての同志社は果たしておったわけで、ひじょうにいい話だという感じでした。ずっと同志社にお勤めになっていったろうと想像するのですが、その後のことは存じ上げませんが。私は、同志社というと、当時、その田中さんというビング・クロスビーのようなきわめて日本には珍しい感じのよき紳士と、きわめて知的な河田さんのお顔が浮かぶくらいでした。田畑忍先生とかいろいろ当時拝顔した方はありますが、最初に浮かんだのはこのお二人でした。いまでもそうであります。

きょうは交通渋滞でして、長くかかったのですが、女子大学の学長室で一服させていただきました。総長先生から、新島先生が、亡くなられて百年であります、四十七歳と少し切れた若さで亡くなったのですが、亡くなられるときに遺言されたことは、十分にまだ果たしていませんといういいお話をうかがいました。

遺言されたことの一つに、学生を大切にしなさい。もう一つは倜儻不羈（てきとうふき）の学生を育てなさい。倜儻不羈というのは口で説明しますから想像してください。変な字です。二度とお目にかからないような字ですが、人べんに一週間、二週間の週のつくりのほう、これが倜であります。儻は、自民党、社会党の古いほうの字に人べんをつけたものであります。ややこしいですね。それで倜儻であります。

倜儻というのは、国語解釈は忘れましたが、自分の考えをしっかりもつこと、人がああいうからといってそこへ行かないこと、自分の考えを明晰にもつことという意味であります。不羈というのは、不は否定の不、羈は、馬に手綱をつけて馬をおとなしくさせる、あの手綱がつかない人、放れ駒のような人のことを不羈というわけです。人に御せられない人、そして明快な、いつも明晰な

考えをもっている人、それが倜儻不羈であります。これはぼくはいま総長から伺ってここで受け売りしているだけで、新島先生にその言葉が遺言にあったとははじめて聞きましたが、明治時代のはやり言葉でもありました。むろん古い千年も二千年も——二千年はないでしょうけれども——前の漢籍からその言葉は出ているのですけれども、明治時代という気分のなかでインテリのあいだで流行した言葉でした。

なぜかというと、早稲田大学をおこした大隈重信の回想録のなかにも、自分は佐賀藩の出身である。肥前の佐賀藩、いまの佐賀県であります。薩長土肥といって官軍であります。新政府をつくったグループの一つであります。『葉隠』という戦時中にもてはやされた変な倫理の本がありまして、けっして普遍的な思想ではない、佐賀藩だけに通用する思想書がありまして、そういうものを教えるようなつまらない藩だと。大隈重信という人は偉い人ですね。自分の出身藩を罵倒しておるわけであります。そして勉強ばかりさせた佐賀藩というのは特殊な藩で、三十何万石あるのですが、六歳、七歳、八歳の小学校課程から、最終は二十五歳くらいまでのあいだ、各課程、つまり、小学校、中学校、高等学校、大学というように各課程を設けて、プロセスを設けて、そのプログラムのなかに藩士の子弟をはめ込んでいって、一回でも落第すると、お禄を削るとか、お役につけないとか、経済的な打撃を与えるようにしてあるシステムで、そのために藩士の子弟はいまの受験生のように勉強する。いまの受験生のように勉強するといっても、いまの受験生のほうがもっと勉強するのでしょうね。これはつまらないことである、こういうことをやっていると倜儻不羈の精神を失うんだ、人間にとっていちばん、あるいは社会にとっていちばん、あるいは国家にとっていちばんだいじなのは倜儻不羈の精神だ、つまり人と交わらない——交わらないというのは色が交わらないということであります。交わるけれども人の考えに同化されない、自分の考えを明快にもっておる、これが学問を興し、国家を興したり、社会にバラエティというものをつくりだす、あるいはクリエート、創造の心をつくりだすもとだと、大隈重信という人はそういうことを言ったのですね。

ところが、新島襄先生は早くも——大隈さんの自叙伝は速記であります。速記録の文体であります。話し言葉であります。それよりも前に遺言のなかで倜儻不羈の精神といって、明治のはやり言葉というと軽くみえますけれども、そうじゃなくて、明治の知識人の合い言葉だった言葉を使っていることに、同志社というのは創立のと

きから大変なものなんだという感じがいたします。

私は大阪に住んでおりまして、やはりどうしても関西のひいきであります。関西に同志社があるということは私どもの誇りであります。あるときに、たいへん大きな企業のえらい人事採用の重役さんとお酒を飲んでいたことがあります。重役さんだから酒を飲んでいるのでなくて、たまたま若いときからの友達であったものですから――。もっと関西の大学を採らなきゃだめだ、つまり、日本でちがった考えをもっているというのは関西だけだ、九州も北海道もありますが、どうしても東京に随順した考えであって、関西で四年間大学を過ごすと、どこの出身であれ、日本一般の色合いとはちがった考え方をもつようになるのだ、それは認めているのだとその重役さんが言いまして、たとえ話にしまして、早稲田と同志社が同点なら、文句なしに同志社を採用するように内規としてできているんだ、つまりそのようにぼくたち同じような考えをもっているんだというときのたとえ話です。東京の代表を早稲田にして、関西の代表を同志社に彼はしたのだろうと思います。

こういう雰囲気というもの、今日こういういいところへ来まして、いい気持ちで私はおるのですけれども、新島襄という人がこれを見たら喜ぶだろうと思います。

私は、私立大学というものは宗教と同じだと思っているところがありました。昭和二十年代のはたち代のころであります。キリスト教はイエスという教祖とバイブルという聖書がなければ、宗教として成立しませんわ。慶応は福沢さんという教祖がいて、『福沢諭吉全集』と『福翁自伝』というものが聖書になっていてでき上がっていますね。それは同志社も同じですね。これをもたない大学と比べるとひじょうに幸福だと思います。ところが『福翁自伝』というものは、いま読んでもおもしろい。なんといっても難しい言葉を使っていませんからね。福沢諭吉という人は、文章は人にわからなければいけないんだ、ぼくはサルが読んでもわかるように書くと、また極端な表現をする人であります。ですからひじょうにわかりやすい。ですから岩波文庫のなかにも『福翁自伝』が入っているわけであります。これは日本における自伝の一番傑作の一つであります。

ところが、新島襄先生は控えめな人でした。ひじょうに控えめな人で、福沢さんのようにどこに行っても動じないというような、別の言葉でいうと、いい意味でちょっと厚かましいような人じゃなくて、ひじょうに控えめな人でしたから、自伝をお書きになることはなかった。それと短命でした。ですからその時間的なゆとりがなか

ったことが、考えてみると同志社のちょっと損をしている一つの点であります。福沢さんもきわめておもしろい人です。そして倜儻不羈の人ですけれども、新島さんも倜儻不羈でした。江戸幕府というのは結局つぶれてしまうのですけれども、つぶれる瞬間まで、天地とともに幕府はあると思っていたらしいですね。つぶそうと思っている連中も、そう思っていない連中も、そう感じていたようです。つぶそうと思っている連中の一人で昭和十四年まで生きた田中光顕という人が自伝のなかで書いていますけれども、あの幕府がつぶれるとは思わなかった。土佐の人間でつぶす側にまわって、走りまわっていたのですけれども。

その時期に幕府の譜代藩――譜代藩というのは正社員のお大名であります。外様藩というのは正社員じゃない、臨時採用のようなお大名であります。薩摩は七十万石といえども外様であります。臨時採用であります。譜代藩というのは江戸幕府の正社員でありますから、石高が小さくても、老中になったり若年寄になったり、幕府の政治を受け持ちます。その譜代藩の、つまり幕府そのものの藩の侍でした。それで脱藩してしまうのですからね。珍しい人ですね。函館まで行って、函館でアメリカの船があったので、話をしているうちに船に乗って、みない紳士でいい人であったからよかったのですけれども、そうじゃなかったら途中でどうなっていたかわかりません。函館を出るときは、ちょうど股旅の国定忠治か何かみたいな格好をしていますね。あれはお侍の格好をするとまずかったからです。町人の格好をしている。そしてご存じのようにアーモスト大学に入る。

新島さんはたいへん明治の人らしくて、武士道の人でした。武士道というのは主君に忠義ということで、その主君を明治時代は失ったものですから、幕臣のエリートの人たちでクリスチャンになった人が多かったですが、やはりその気分のなかにいて、キリスト教というものがひじょうに自然に入ったようであります。

長州に木戸孝允という人がいまして、明治政府の偉い人でした。木戸タカヨシです。ぼくはコウインとしておぼえているものですから――。アメリカ見学に行きました。明治四年です。明治維新が起こってたった四年たったときです。木戸孝允という人は、物のわかった明るい感じで、ずいぶん男まえで、スポーツマンでもあったのですけれども、キリスト嫌いでした。というのは、三百年もキリシタンは悪いという宣伝を受けたわけですね。徳川御禁制であります。江戸幕府は二百七十年続きました。憲法などはありません。ありませんが、たった一ヵ

条憲法があるとしたら、キリシタンは禁止である、もしキリシタンになれば焼き殺すという恐ろしい一条だけはある政府でした。ですから、三百年もそう教えられるものですから、明治政府のえらい人になって、革命家上がりで、しかも物のわかった木戸孝允でさえ、クリスチャンは恐ろしい、キリシタン・バテレンであると思っているわけであります。

ところがアメリカに行ってから、実際は幕末の密航者で、密出国者で、その意味では江戸幕府にとって大犯罪人であるはずの新島襄が、新政府になってから、きっと新政府のアメリカ駐在の人が新島青年を愛していたのでしょうね、木戸という政府の偉い人が来るが、君はくっついていろいろお世話してやってくれ。新島青年は通訳の役についたわけです。新島さんを見て木戸孝允は、これがクリスチャンなら、キリシタン・バテレンというのは怖くないと思ったらしい。だんだんつきあっているうちに、クリスチャンこそすばらしいと思うようになったわけであります。木戸孝允はむろんクリスチャンにはなりませんでしたけれども、キリスト教にたいする木戸孝允の二百七十年の迷信というものは、新島青年を見ることによって取れてしまったわけであります。

新島青年には、有名な話がありますですね。私はちょっと正確な記憶はありませんが、大学を卒業してお説教をする。卒業したての大学生が、神学部の出身であります、お説教をする。これは新教、プロテスタント、同志社の神学を想像してくださったらいいのですが、カトリックではありません。プロテスタントであります。プロテスタントのお説教、アメリカの東部はプロテスタントの深い土壌の土地であります。ですから、お説教を聴きに来る人が多いそうですね。出たての学生だからといってなめたりせずに、出たての学生が神のことをどう言うのだろうというので、初々しい気持ちでお説教に来ていたようですね。当時のアメリカは今のアメリカでなくて、まだニューイングランドのほうではピューリタニズムといいますか、そういう心が残っていた時代であります。

新島青年はお説教をしまして、自分は日本に帰って学校を立てたい、日本をアジアの深い霧の中から救い出すのは学校をつくることである、そしてアメリカのような国にしたいのだ、そのアメリカのような国にするには、キリスト教精神による大学をつくりたいのだと言ったら、なんと、募金が目の前で集まったわけであります。最後にやってきた一人の老農夫は二ドルほど差し出しました。これは昔の説話にあるような、つまり貧者の一灯といったような話であります。その農夫は汽車で一時間

ほどかかる田舎から出てきてお説教を聴いた。それは帰りの汽車賃であります。帰りの汽車賃を差し出したわけであります。彼は帰りは歩いて帰るわけであります。そういう瞬間から同志社大学は始まっていると思えば、ひじょうにこの大学というのは感動的であります。

それから、いまオーテス・ケーリ先生のことを申し上げましたが、オーテス・ケーリ先生というのは、おじいさんの代から日本に来ておられるのですね、宣教師として。オーテス・ケーリ先生はやはりアーモスト大学の出身であります。歴代、代々の宣教師の家柄であります。太平洋戦争が起こりまして、日本と戦争しなきゃいけない、そうすると、日本語ができる学生を促成栽培しなければいけない、それで各大学から秀才を選りすぐって、つまり志願であります、授業料はただである、お金もあげる、集まれというので、集まった人がだいたいいまの日本学の基礎になっている人であります。サイデンステッカーさんも、ドナルド・キーン、この人は不滅の日本学者であります。ドナルド・キーン博士も、そしてアーモスト大学におられたオーテス・ケーリ先生もその一人です。海軍の士官になります。ドナルド・キーンさんとたしかアッツ島だったか、アッツ島の隣の島だったか忘れましたけれども、そこに敵前上陸するというので軍艦に乗っていって、アッツ島には日本軍がいるはずだ、ところが深い深い海の霧が島に立ちこめていてよくわからない。実際はキスカ島だったかもわかりません。アリューシャンの一つの島であります。実際には闇にまぎれてこっそり全日本軍がきれいに一人残らず撤退していたわけでありますけれども、それがアメリカ軍にはわからずに、深い霧の中でまず艦砲射撃を加えて、あした上陸しよう。その上陸の前の日に、ドナルド・キーン中尉は『源氏物語』を読んでいたそうですな。いい話だと思いませんですか。『源氏物語』を読んでいたそうですね。オーテス・ケーリさんは何を読んでいたか知りませんが——。そして明くる日の朝、どうもようすがおかしい、日本軍はいないようだ、オーテス・ケーリ中尉とドナルド・キーン中尉は二人で上陸せよ。二人で上陸したそうですな、べつに兵器も持たずに。誰もいなかったそうであります。だれかいたら、日本語ができる二人ですから質問するつもりだったのでしょう。

こういう雰囲気のなかで私は同志社の周辺をいま話しているのですが、ドナルド・キーンさんとは二十年来のつきあいがあるのですが、キーンさんが関西に来ると、うれしそうにきょうはアーモスト館に泊まります、つまり、オーテス・ケーリ先生と、お若い時にキスカ島だっ

たかアッツ島だったかに上陸した二人の若い語学士官が、いまだにおつきあいが続いているというのはすばらしいことですが、同時に二人の人柄のよさも推し量られるわけであります。「アーモスト館に泊まるのです」というのは実にうれしそうな顔で、何度もそういう話を聞きました。

私はこの話をしておりますときに、ずっとキリスト教のことを思っておりまして、そして同志社大学に神学部がある。皆さんこのなかで、私も仏教徒ですが、キリスト教の人はあまりいないでしょうな。同志社に入ったからといって、出るときにクリスチャンになっていたという人もあまりいないでしょうな。これ実に日本というのは頑固な社会ですね。考えてごらんなさい。世界中のクリスチャンがお金を出して、東京の築地にたとえば聖路加病院をつくったり、それからカトリックのイエズス会の信徒がお金を出して上智大学をつくったり、そしてアングリカン・チャーチというイギリスの国教会、これもプロテスタントの仲間に入るのですね、がお金を出して立教大学をつくったり、それから各地の病院、高等学校でいえば鹿児島のラサールとかいうようなところにお金を出して、ずいぶんお金を出していただいているのですけれども、明治以来お金を出していただいているのですけれども、いっこうにクリスチャンの数は増えませんですね。

戦国時代にキリスト教がひろまりました。九州と近畿地方が中心でした。九州では普通の人がクリスチャンになったりしましたが、近畿地方はいい家の人がなったりしました。やっぱり大名の多かった土地でしたから。インテリといえばクリスチャンというような感じまであった時期が豊臣秀吉のころにはありました。しかしその後の二百七十年、これは禁教のせいでしような、キリシタン・バテレンは恐ろしいというせいでしようね。戦国時代に十五万人とか三十万人いたとかいう数字がありますが、ひじように不正確な数字であります。よくわかりません。しかし、いまそれよりもはるかに多いということはいえないのじゃないでしょうか。カトリックとプロテスタントを入れて五十万人を超えているでしょうか。しかしキリスト教の設備はたくさんあるんですよ。さっきいった上智大学、立教大学、聖路加病院、明治学院、青山学院、そして現在同志社大学がある。同志社大学はミッションスクールでありません。いま挙げたのはミッションスクールで、伝道のために世界中の各地の信徒が教会でお金を出して、立教大学なら立教大学、あるいは明治学院なら明治学院ができ上がって、ミッションであり

ます。関西学院もミッションスクールであります。しかし同志社大学はミッションスクールではありませんで、キリスト教精神によるというだけであります。ここは新島先生のえらいところであって、当時伝道は会社でやっていたところもあるのです。アメリカなんか会社でやっていて、会社から野蛮な土地に宣教師を派遣したりしていました。皆さんが書いているヘボン式のローマ字のヘボンさん、これはアメリカ人であります。お医者さんであります。ずいぶんよくはやっていたお医者さんであります。医院をたたみまして日本に伝道に行く。伝道会社からお金をもらったかどうか知りませんが、お金持ちだから自費で行ったのでしょう。そして横浜に来てローマ字をつくったり、明治学院をつくったりしました。ヘップバーンという名前であります。日本人が発音をするとヘボンと聞こえたそうですな。だからヘボン先生、そういう人はみなミッションでした。明治学院もミッションスクールでした。しかし同志社大学はミッションスクールではないのであります。つまり紐つきではないのであります。それでなおキリスト教がもうひとつ振るわないというのは、私は異教徒ながら嘆かわしいと思うんですね。なぜ嘆かわしいということはいまから話します。

私ども日本人にひじょうにわかりにくいことが一つあります。日本人というのは賢い民族だと思うのです。そして物事がよくわかって、これは戦国時代に来たフランシスコ・ザビエルさんもずいぶんほめてくれていますし、江戸時代の末期に来た人もほめてくれています。近ごろはあまりほめられないですけれども、これはあまりパワーを持ちすぎたためであろうと思いますが、か弱かったころはずいぶんほめられています。賢い民族だと思います。それでもわからないことがあるということをいまから申し上げるのですが、それは「絶対」ということがわからない。絶対というのは、神さまはありますか、ありますとか、ありませんとかというのは相対的世界です。神さまはある、ないという相対的世界。サイエンスの世界が相対的世界、われわれの地球も相対的世界、宇宙も相対的世界、科学はすべて相対的世界、あるとかないの世界であります。あるとかないを超えた一点、架空の一点、これが絶対であります。それが神であるらしいのですな。それから哲学上の絶対であるらしいのですけれども、それがわからない。これがわからないとヨーロッパがわからないわけであります。ヨーロッパ文明そのものの基本もわかりにくい。

ところが、ぼくらはわからない。なぜわからないかというと、あまりにもクリスチャンが少なすぎるからであ

る。私はキリスト教の布教に来ているわけではないのでありますが、絶対ということがわからなければ、大学に入って物事を思考するときに不便である。便利、不便の話をしているのであります。工学部でエンジニアになる訓練をうけるということもだいじですが、なぜ機械というものが存在するのか、なぜ人間というものが存在するのか、基本的なことを考えるとき、絶対というそっぱちを――神さんはうそっぱちだと、神学部の先生がもしおられたら、私は地獄に行くだけですが、私は相対的世界の人間であります。仏教徒であります。

仏教徒は、相対的世界とはちょっと外れて空というものを信用している人で、空というのは、数学でいうゼロの意味であります。インドでおこったゼロですよ、ゼロですよというのは、中国へ行くと変な漢字があてられて空とか無とかいうから、なにか神秘的になるのですけれども、インド人が数学のゼロを発見したそうですな。アラビア人と交通しているうちにインドの西海岸でゼロが発見された。そうしたら、インドには古代に哲学者が多かった。おもしろいなといってでき上がっていったのが――それだけではありませんが、ひじょうに簡単にいうと、数学上のゼロはすべての数字が入る。そしてゼロは大いなるプラスであり、大いなるマイナスである、すべての数字がそのなかに入る。世界がすべて入る。われわれはゼロ、生命はゼロ、宇宙はゼロ、それが空とか無とかいうことであります。これは仏教でありまして、これはゴッドとはちがうのです。お釈迦さんの仏教というものは、われわれはなじみ深いわけでありますが、お釈迦さんは世界をつくったわけではないのです。恐ろしいことにキリスト教の神は世界をつくったのです。クリエーターであります。世界を創造した人、そんな人がいるとは私には思えないのですけれども、いるということでヨーロッパ文明は成立して、枝葉にいたるまで、隅々まで、つまり文学とか哲学とかいうところまで、神を信じていない人でも絶対ということはあると思っているわけです。私は絶対というものはないと思っています。ないと思っていて、ここではもうちょっとクリスチャンがいないものでしょうかといって不満を並べているのですが、要するに絶対というものがわからないのが、われわれ日本人だと思わないといけない。

フランシスコ・ザビエルという人のことをさっき話しました。この人はおもしろい人ですね。いい感じの人だと思うのです。べつに威張った人でもなく、豪傑肌の人でもなく、平凡な秀才でした。けっしてお坊さんになろうとは思っていませんでした。日本にやってくるはめに

なって、日本人が最初に見た西洋人であります。ところがこの西洋人は、スウェーデン人のような碧い目をしていなかったのです。黒い目と黒い髪でした。安心したのでしょうね。日本人は、最初にスウェーデン人がやってきたらびっくりしたのじゃないでしょうか。ところがこの人は、スペイン人といえるのかな、フランスとスペインの間にピレネー山脈という山脈がありますね、そのピレネー山脈をフランスから越えればスペインであります。髪の毛がだいぶん黒くなっていて、背が小さい。ザビエルはそこの人であります。

ただし、スペイン人では厳密にはなくて、ピレネー山脈のなかにいる――いまでも二百万人ほどいますが、バスク人という少数民族である。バスク人がどこから来たかはわからないそうであります。バスク人というのはわからんそうですな。神戸に神父さんがおられて、バスク人であります。バスク人って何ですか、日本のアイヌのようなものですと。そんなものかなと思ったりしますけれども、バスクはフランシスコ・ザビエルを生んだわけであります。

バスクは八世紀のころにキリスト教になりました。言語のバスク語というのは日本語と似ているのです。日本というのはなんでも本にして便利のいい国で、『バスク語六週間』という本があるのです。で私はこの『バスク語六週間』というのを買って五分ほど読みました。それしか読んでいませんが、なんだか日本語と構成が似ています。似ているとかつていわれてきたから読んでみたのですが、やや似ているように思える。ヨーロッパのように「私はどこそこへ行く」というのは「私は行く、どこそこへ」という順序じゃないのです。日本語と似た順序です。バスク人はどこから来たかというのは昔から謎であります。バスク語はとても難しい言葉だというのは、ヨーロッパに住んでいる人にとってはそうでした。

これは枝葉の話をしているようですが、ザビエルの出たバスクは、カトリックの信仰の篤いところでありましたので、ローマの神学校では、神父さんのための外国語学科としてバスク語科というのがありました。それはとても学生がわからないのです。フランス人や、スペイン人や、ドイツ人なんかが習ってもわからない。日本語を習うようなものであります。言葉が逆になっていると彼らは思うわけです。それで神学校にできた伝説に、あるときに神さまが悪魔をやっと捕らえた、さあ、こんどはおまえをひどい目にあわせるから岩牢に閉じこめるといっても、いや、どうぞ、どうぞといって悪魔は平気であります。ところが神さまはある日思いついて、三年間お

まえを岩牢に閉じこめてバスク語を習わせるといったら、悪魔は真っ青になって、もう悪いことはしませんと言ったという。神学校にそんな笑い話ができているというのは、よほど困難な言葉だった。日本人が学べばそうでないかもしれません。

ザビエルさんはそこの出身であります。どこかスペインの系統の顔ですから、あるいはイベリア半島というああいう特別なところの顔ですから、ザビエルさんはスウェーデン人とちがう顔であります。

鹿児島に上陸しまして、そのスポンサーのポルトガル王だったか、スペイン王だったか、どっちか忘れましたが、船はザビエルさんをおろしますと、一週間たって出て行きます。その出て行く船にザビエルさんは手紙を書く。鹿児島の海岸で見ただけの一週間の見聞を書いて、実に正確な日本描写、日本人論を展開して、この国は征服すべきではない、けっしてここの国へ来てはだめだ、みな名誉心の強い、そして敵にたいしてはよく戦う人々である、そして賢い、というようなことを書いて送ったのですが、そのザビエルさんの書簡集、報告のためにずいぶんいい感じの文章です。書簡集があります。岩波文庫にあります。

九州の田舎の人に説教していましたら、田舎の人が「質問があるのですが」「どういうことか」と言うと、「そんなに神さまがすべてをみそこなわしていらっしゃるなら、どうしてわれわれは発見されることが遅かったのでしょう」。これはすごいと思いませんか。神はすべてをみそなわされる。この世界をつくって、そして人間をつくった。自分に似た姿として人間をつくって、そしてすべてを見ておる。そうしたら、日本人だって初めからわかっているはずなんですが、はるばると日本の天文時代、戦国時代にやってきて、ザビエルが日本を発見したわけであります。だからまじめな質問です。からかった質問ではないんですよ。どうして神さまはわれわれを遅く発見したのかと。このザビエルの手紙によりますと、この質問に私は答えた——どう答えたのか知りませんが、これは私はアリストテレスの哲学をやっていてよかった。つまり論理と修辞——修辞というのは、悪い言葉でいうと言いくるめの言葉です。上等にいうと修辞学、あるいは論理学をやっていてよかった。日本に以後来る宣教師は、ぜひギリシャ哲学をやったものをよこしてもらいたい、はじめから神さまというだけではついてこない、この国の人はちゃんと知的に反応して、知的に物を理解しようとしているという意味であります。

これは余談になりますが、私は日本のキリスト教の運

命として話しているのですが、そして絶対ということは日本人にはわかりにくいということを話しているのですが、私は以前からザビエルは好きでしたから、いまでも好きですが、ピレネー山脈を越えて向こう側、スペイン側の山麓のところにお城があります。鉄の錆の塊のようなお城でした。お城といっても、キャッスルというのは城壁のことですが、単独の防衛上のお城のことであります。フォートというか、ドンジョンというか、防衛上の砦のようなお城です。なかに入るとたいへん息苦しいような、岩のなかのようなたいへんいいお城でしたが、そこに生まれまして、王子さまである。旅に出ていったのは、ソルボンヌに入ったのですけれども、哲学をやりたかった。ギリシャ哲学をやりたかったわけで、坊さんになりたかったわけではないのであります。陸上競技も好きで、百メートルか五十メートルか知らないけれども、走るのを楽しみにして暮らしているような青年でした。

ただ、この青年に目をつけた一人の気味の悪い傷痍軍人、これもバスク人ですが、イグナティウス・ロヨラ、皆さん社会科で、西洋史で記憶されたはずですが、イエズス会の創始者であります。当時は創始者じゃなくて、単に足を傷つけられて、少し足の不自由な学生でした。ソルボンヌの老学生といいますが、スペインのバスク地方の貴族なんですけれども、いい年で学生になっていて、なんだか知らないけれども物おぼえが悪いのですけれども、なにか変なお化けのような志をもった人でした。

当時、プロテスタントが出てきまして、カトリックはもう滅ぶかもしれない、ローマン・カトリックは滅ぶかもしれないということを必要以上に思っていた人でした。自分は神父さんじゃないんですよ。普通の兵隊でどこかの戦争に行って足を傷つけた人なんですけれども、何か知らないけれども、さっきの幕府が瓦解して、明治維新が起こってあるじを失った知識人つまり侍たちが新しいあるじとしてクリスチャンになった人が多い。内村鑑三も新渡戸稲造も、新島襄もあるいはそうかもしれないといいましたが、イグナティウス・ロヨラもそうでした。傷痍軍人になったために国王のために働くことができない。それよりもマリアのために働きたい。プロテスタントにはマリアはありませんが、カトリックではマリアはだいじなものであります。べつに神さまではありませんけれども。神さまはあくまでも三位一体ですから父と子と聖霊ですが、マリアさまが導いてくれるというので、マリアさまに仕えるほうがナイトとして気分がいい。遙かに蛮地に行ってキリスト教の教えをひろげることでカトリックを回復しよう。いままではヨーロッパだけで

あった。アジアへ行こう。インドおよびその向こうに行こう。そのために同志を募ろう。それでロヨラはザビエルを見込んだのですな。

ザビエルは逃げまわっていたわけです。そんな宣教師みたいなのはいやだ、坊さんはいやだというので逃げまわっていて、しまいにつかまったのですな。つかまってしまって覚悟して、いまパリにモンマルトルという、絵かきのたくさんいた、十九世紀の印象派の聖地のようになっているところですが、なんでもない丘であります。当時はモンマルトルの丘へ行っても、ほんとうに丘だったのでしょう。都会化されてなかったと思いますが、そこへ登って七人の同志が結束したのがイエズス会であります。いま日本では上智大学ができていますが、そのイエズス会から派遣されてきたのがフランシスコ・ザビエルであります。そこで徳川幕府が禁制しました。キリシタンはペケと、憲法以上の恐るべきただ一ヵ条の憲法でした。

われわれいまここにおるのですけれども、さっき、あるとかないとかという相対的な世界を越えた絶対的なものと申し上げました。空は別だ、空は別だということをしきりに言っていたそこにお坊さんが一人いらっしゃいまして、その人は私の知り合いです。大徳寺のお坊さんであります。空は別でありますが、空は別でありますが、あるとかないとかを超えた絶対、そしてその絶対者が世界を創造するわけです。つくるわけです。そして神はいまでもつくりつつあるわけです。火山、それから海の変化、海底の変化、いろんな地球環境や宇宙環境をつくりつつあるわけであります。そんなことが世の中にありうるか、サイエンスはそれを認めません。ヨーロッパでおこったサイエンスはむろん相対的世界であります。しかし絶対ということがわからないと、どうもうまくいかないのじゃないか、なにもクリスチャンにならなくてもいいのですが、絶対ということをわかりましょうという話にきょうはどうもなりそうですな。

清沢満之という人がいました。清沢満之は名古屋の人であります。尾張藩の足軽の家に生まれて、明治初年、明治元年か二年くらいに少年から青年になったときに、東本願寺が、明治維新が起こって文明開化の世の中になって、何もかも西洋化ということになったときに、南無阿弥陀仏をとなえて極楽に行けるなんて寝言のようなことを言っても、これは滅びると東本願寺は思ったのでしょうね。お坊さんの子じゃないのですけれども、信徒の子である清沢満之少年にお金をたっぷり与えて、できたばかりの東京大学に——当時は東京大学は文明開化の機

械でした。東京大学というマシンを通過することによって、つまり、世界の情報、サイエンスの情報とか、哲学的な情報とか、その他の情報が通過することによって日本は文明開化していくというようなシステムとして東京大学はつくられた。東京大学がつくられるということは、要するにサイエンスを興すことでした。ただ、えらいのは、サイエンスの基礎は哲学だということは当時の日本人は知っていたみたいで、文学部に哲学科というのができました。清沢満之はそこに入ったわけであります。それは本願寺の命令でした。

清沢満之は親鸞聖人をよく知っていますよ、教祖ですから。親鸞は不思議な人で、『歎異抄』という本を書いて、これはいい本ですね、『歎異抄』は皆さん岩波文庫で買えます。なんでも岩波文庫と言っていますが、数百円で買える本であります。いい文章です。南無阿弥陀仏をとなえるだけで極楽へ行くことができる、いろんなことをしなくてもいい、叡山で修行したり、お経の学問を習ったら極楽往生できるのじゃなくて、南無阿弥陀仏ととなえまいらすだけで極楽へ行ける。『歎異抄』にそう書いてあります。『歎異抄』は親鸞の正式の著作ではなくて、正式の著作は『教行信証』という漢文で書かれた著作があります。あまり上手でない漢文であります。一生懸命自分の思想を表現するためにつくっているだけの漢文であります。日本の思想的文化財の重要なものの一つであります。『教行信証』はあまり一般には売られていません。『歎異抄』は売られています。

それは、関東に唯円房という人がいて、唯円房という人が、ほんとうに南無阿弥陀仏をとなえるだけでいいのか、まじないか何かしなければいけないのじゃないか、秘密の方法があるのじゃないかということで、遙かに京都の親鸞のところへたずねに来るわけであります。親鸞はもう年を取っています。その速記録であります。ですから当時の言葉で書かれておって、唯円という人は関東の草深い田舎の人なんですけれども、うまい文章ですね。『歎異抄』というのは、室町初期、鎌倉末のよき文学、すぐれた言語で書かれた作品をすべて文学だとすれば、たいへんな文学的収穫であります。唯円房が速記として書いた。何十余ヵ国の境を越えてわざわざ親鸞のもとにいろんなことを聞きに来たけれども、親鸞には何も教えるべきことがない、というところから始まる文章というのは実に名文であります。

そして親鸞には、キリスト教でいえば原罪意識があります。キリスト教にちょっと似ています。みんな罪びとであるということを「悪人」という言葉にしました。そ

して悪人という言葉は、悪い人、監獄に入れなきゃいけないような悪い人という意味じゃなくて、出来のわるい人という意味も入っています。叡山で修行ができるような頭と根気と体力をもっていない人、これを悪人。「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」という有名な言葉はこの『歎異抄』にあるわけです。善人でも往生する、悪人はむろんできますよというレトリックであります。

そのことは清沢満之はよく知っていました。彼は東京大学哲学科で最初にヘーゲルの哲学をやった人である。彼の任務は親鸞を見直すことです。そして結局書き直しました。ヘーゲルの哲学で親鸞の教学をすっかりブラッシュアップ、洗い直した。つくり直したわけではありませんが、つまり近代に堪えられるようにしました。それで本願寺は生き残ったわけであります。そうでなければ本願寺はいまもうないでしょう。

清沢満之はそのときにはじめて「絶対」という言葉を使っている。絶対という言葉は、明治以前にはじっさいその意味に値するような使い方では存在しませんでした。アブソリュートという意味では存在しませんでした。はじめて清沢満之が明治になって使った言葉である。絶対他力の道という考えを本願寺の思想に入れたわけであります。絶対他力の「他」というのは、他人という意味ではなくて仏さまという意味で、阿弥陀如来というのが他であります。「自」というのは自分であります。自力、自分で修行して極楽へ行くということは必要ない。阿弥陀如来という他者にすがれ。その阿弥陀如来の他力というものは、相対的なものでなく絶対的なものであるという使い方をしました。これが最初の使用例であります。しかしそれは清沢さんといえども、意味を強めるために私どもがよく「絶対そういうことはありません」と言うて使うような程度の、ちょっと強いめの言葉でした。西洋における絶対ということと少しちがうのではないか。清沢さんはドイツ哲学者で偉い人なんですが、ご自身ご存じだったろうと思うんですが、親鸞の哲学を近代化するのに絶対という言葉を使ったのはみごとだと思うのですけれども、しかし、われわれは、わかりませんね。

阿弥陀如来は絶対だと。阿弥陀如来というのは要するに空であります。さっき、インドの西海岸でゼロという数字ができて、それが思想化された、それが中国に伝わって空とか無とかいう漢字があてられるようになって、それで日本に来たものですから、なにか神秘的な感じがしていけないわけです。ゼロだと思えばいい。ゼロというものが阿弥陀如来という名前である。宗旨によっては

大日如来という名前であり、奈良の東大寺の大仏さまは毘盧遮那仏といいますが、あれもゼロであります。輝けるゼロであります。毘盧遮那仏ははじめ聖武天皇が金箔でつくりました。あれはすごい金でした。ぴかぴかしたものでした。輝けるゼロ、宇宙そのものであります、宇宙は輝いておりますから。それが仏教の空であります。名前が阿弥陀如来というだけであって、阿弥陀如来は空である。空は絶対かといったら、絶対とか相対とかいうことではなくて、どうもちがう感じであります。うまくぼくは言えませんが、空と言ってしまえば小説も書けないのです。哲学もつくれないのです。

あとからちょっと説明していきますが、神、ゴッド、大文字のゴッドはあるんだ、神はあるんだと。だれだって疑わしいでしょう。はじめキリスト教がひろまっていきます。そのとき、ローマ帝国のある時期にキリスト教はローマ帝国から採用されて、国教になってひろまっていきます。神はあるんだ、しかも神は一人しかいない、絶対である、あとに小文字の神というのはいないんだと。ところが、紀元後しばらくのローマ帝国のある時期のヨーロッパ世界というのは、日本の神道と同じ多神教の世界でした。あるいは汎神論的な世界でした。神々がいました。妖精がいたり、水の神さまがいたり、河童がいたり——河童はいませんけれども、そのたぐいがいっぱいいました。そんなものは全部インチキなんだ、神は一つ、絶対なんだと。そして動物も、私どもはタヌキとかキツネは化けると思っていますし、タヌキやキツネを祀ったほこらもあります。これはキリスト教ではありえないことであります。神だけが人間をつくったのであって、タヌキとか、キツネとか、イヌとか、サルとかいうのは、神さまによってつくられはしたものの、神さまに似せてつくられてないものですから、それらが神秘性をもつということは、キリスト教では邪教であります。

その妖精のたぐい、フェアリーのたぐいがヨーロッパ中にいたのをいちいちつぶしていったのがローマから来たキリスト教であるカトリックであります。それは絶対ということを教えてまわった。そんなイヌや、タヌキや、キツネを、日本風にいってえらいというようなものではないんだ、神は絶対、あがめるべきは神のみ、イヌやタヌキ、キツネのたぐいをあがめるな、お化けもいない、何もいない絶対だと。

そして、これもちょっと余談ですが、ローマ文明というものは、その輝かしさは比類がなかった。それは渡れない河に大きな石の橋をつくったり、乾いていて住めないような地面に土木工事をおこして、どこからか水道を

引いてくる。水道といっても、高いご存じの石の構造物ですね。どこかの河から水を引いてきて、そこを潤す。ローマ文明というのはほんとうに輝けるもので、ヨーロッパ唯一の光。当時は野蛮でした。野蛮のヨーロッパ。第一、ローマ人は映画で見ても布を着ていますよね。ところが当時のドイツ人――ドイツ人とは呼んでいませんが、チュートンの森にいたゲルマンの人々やケルトの人々というのは、獣の皮を着ていました。着物を着ている人、それだけでも偉大であります。

ローマは滅びますが、滅ぶ前にキリスト教は国教化されます。もしローマにキリスト教のカトリックの本部を置かなければ、カトリックはいまないでしょうね。ローマに本部を置いて、そしてローマの偉大さは隅々までみな知っていますから、私はローマから来たと言ったら、みなそうですかと言って床の間に――床の間なんてないですけれども、床の間に据えて、そしてお話を伺いましょう、いや、実は神は一つしかない、絶対である、という話をしはじめるわけであります。

それは長くかかりました。ローマの神学校では、神はある、なんとなればこういうわけだとか、なぜ神はあるか、神は必ず存在する、という神学がくり返し千数百年おこない続けられてきたわけであります。ちょうど神というがらんどうの建屋は――品がないですけれども、もしクリスチャンがおられたらごめんください。空洞のなかに見えない筒があるとして、それに糸を巻いて、これは論理で巻く、修辞で巻く、哲学的な思考で巻く、あらゆるもので巻いて太くして、なかにがらんどうがあるとはとても思えないようにしたのが神というものであり、絶対というものである。この神がある、あるといっているあいだにヨーロッパの哲学がおこり、その糸巻のなかからおこったわけであります。ヨーロッパ人の言語もそこで精密になりました。それは神はあると言うためにはきっと、何冊もの本を一人で書かなきゃいけないくらいしゃべるのでしょう。それはすぐれた言語になっていくはずです。ないものをあると言うときにはたくさんの言葉が要ります。たとえば相対的世界ですと、同志社大学の構内のどこそこに穴ぼこがあるから気をつけなさいよと言えばわかります。行った目の前に穴ぼこがあるのですから。そこに落ちないようにと、これは相対的世界です。しかし、見えないもの、絶対のものを説明しようと思ったら、すごい言語が必要です。言語は発達します。文学も発達します。思想も発達します。哲学も発達します。

近代に入って、神はないかもしれんなと思いはじめる

ところから近代文学などができてくるわけであります。文学だけでなくて、近代的な思想もできていきます。あるいはマルクスのような人も出てきます。しかしそれはやっぱり同じことをやっていたんですね。ローマの古き時代の神学者たちのように、千数百年かけた神学論議のように、神学的思考のように、最初に真ん中にフィクションを置くわけであります。そのフィクションは、ゴッドが大文字であるように、この場合のフィクションもやはり大文字にすべきでしょうね。私どもが使う、日本の小説家が使うフィクションは、いや、あの部分はフィクションですと言う、そんなような使い方ではなくて、物の核心のなかにフィクションがあるわけです。この宇宙はどうしてつくられたか、どうしてこういうように変化し発展しているのか、真ん中にどんとフィクションを置くといっぺんにわかるわけで、神である。これが絶対というものでしょう。

小説を書いても、フィクションと言うのは、ドストエフスキーの『罪と罰』でも、その他の何々でも、皆さん想像してください。日本の小説とはちがいます。日本の小説というものは、私は自分のことをはずして言います。大正末年から、あるいは大正時代から昭和初年にでき上がっていく日本の小説というものは、私小説が中心でした。志賀直哉さんとか尾崎一雄さんの世界である。これが日本文学の基本的なものであります。それは天神様とか、その辺の藪の神様とかという世界。絶対の世界じゃありません。私は志賀直哉のファンでありますが、そして尾崎一雄についてはそれ以上のファンでありますけれども、神々の遊びであります。神遊びのようにして、碁を打ちに友達の家に行く。その碁を打っている姿を文章にしたら小説であります。私小説です。主人公はちがう名前になっていますけれども、どうもこれは作者のことらしい。志賀直哉さんは若いころお父さんに反抗して放浪しました。『暗夜行路』という名作を書きました。人生を神遊びの場と考えているものですから、ファクトの世界、事実の世界であります。相対的な世界である。トゥルーの世界でなくて、目で見てわかる、自分が経験したもの、そして自分が小さな神々の一人であるために、神だから威張っているわけでなくて、小説を書く人間というのは、とくに私小説の人は、自分を透明化していかなければいけない。自分の欲望があってもいいですが、欲望を凝視して透明化していかなければ私小説は書けませんが、それはつまり神遊びの神さまみたいなものですね。大文字のゴッドではなく、絶対ではなく、大文字のフィクションでもない。それがわれわれの国の、私はそれを

誇りに思っていますけれども、しかしたいへんな違いであります。

西洋との違いはそこにある。だからといって、クリスチャンになったら西洋がわかるというわけではありませんよ。けっして早まらずに、あのときあんなことを言ったから私はすっかりクリスチャンになりましたと。それも結構ですけれども、同志社の精神の基本には、新島さんの絶対への随順というすばらしい姿勢があるのと、そして絶対者がいると、われわれは平等であります。そして倜儻不羈な少年少女を許せる気持ちになります。絶対者から見れば、絶対者からあずかっているわけでありますから。せっかく神学部があることでありますので、そしてここはミッションという紐つきじゃありません。しかし基本的にキリスト教精神ででき上がっている学校ですから、皆さんのほうはきっとこの話を聞いて、私よりも深い考えをもつことが将来できるのだろうと私は思うのであります。

どうもありがとうございました。（拍手）

（本稿は、去る四月二十五日、女子大学田辺キャンパス新島記念講堂で行われた新島襄先生永眠百周年記念講演会での講演速記録を編集部においてまとめたものである。）

キャンパスの年輪

―同志社今出川校地―

（増補改訂）B5判　二一二頁
一、五〇〇円（送料三〇〇円）
社史資料室長
河野仁昭著

百十余年の歴史を経た今出川キャンパスには国の重要文化財に指定された彰栄館・チャペルなどの五棟を始め多くの建物あるいは既に姿を消した建物があります。

これらの由緒ある建物に限らず石段・記念碑・樹木を中心に、普段余り意識されていない様なものも含めて、それぞれに纏わる話題を軽妙なタッチで書かれた文章に、新旧の写真・地図などを掲載した話題の豊富な美しい書物です。

また巻末には新島襄の足跡・田辺新キャンパス誕生の経緯なども収録し、校友・同窓は青春時代を、在学生は多くの先輩が残された業績をしのぶ格好の書としてご購読ください。

◉購入ご希望の方は、左記へ直接電話または文書でお申込みください。

◉代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

同志社収益事業課
京都市上京区今出川通烏丸東入る
電話（〇七五）―二五一―三〇三七・八

新島襄先生永眠百周年記念講演会

新島襄と山本覚馬
――京都の近代化・同志社

河野仁昭

はじめに

ご紹介いただきました河野でございます。

「新島襄先生永眠一〇〇周年記念」という企画を人文科学研究所がおたてになって、こうした催しをなさいますことに対しまして、たんに職務上ということではなく、同志社に勤務いたしている者の一人として心から敬意を表する次第でございます。

研究所の高久嶺之介先生から企画についてお話がございまして、私はもちろん諸手をあげて賛成したわけでありますが、まさか私がこのような晴れがましい場所へ出てきて、何かお話をすることになろうとは思っていませんでした。

同志社英学校は、新島襄、山本覚馬、ジェローム・ディーン・デイヴィスの三名によって創設されたものであることは、先ほど、藤馬龍太郎人文研所長がご挨拶のなかでも述べられました。全くそのとおりだと私も考えておりますが、山本とデイヴィスがはたした役割については、これまであまり具体的な研究はなされていないように思うのです。それで本日は、山本覚馬という人物は同志社の創設と維持発展にどうかかわったのか、ということを中心にお話させていただきたいと思います。

ご承知のように会津藩士であった山本は、明治維新後

の京都の産業や教育の近代化に大きく貢献します。そのことと同志社英学校の創設を関連づけて考えてみたいというのがお話の趣旨でございます。ですから問題がずいぶん大きいのに加えて、山本家に関する資料はほとんど現存いたしませんので、余り実証的なお話はできそうにございません。その点、甚だ勝手でありますけれども、あらかじめご諒承くださいますようにお願い申し上げます。

本題とは直接の関係はございませんが、山本覚馬が慶応四年一月に薩摩軍に捕えられたのは、これまで洛東の蹴上あたりだとされてきました。山本の弟子である浜岡光哲も、「山本覚馬翁略伝」（『同志社文学』第六十一号、明治二十六年一月）にそう書いております。ところが、ごく最近、会津若松市の宮崎十三八という歴史家が、鹿児島県立図書館に所蔵されている『薩摩藩慶応出陣戦状』巻二のコピーをとり寄せて調べましたところ、これには、二十名のうちの一人として大阪で生捕にされた旨が記載されているそうです（宮崎「山本覚馬『管見』解説」『歴史春秋』第三十一号、平成二年五月）。山本の名前は「山元角馬」となっているようですが、間違いないでしょう。彼も鳥羽・伏見、淀、大阪と転戦した幕府軍の中にいたに相違ございません。新しい資料による情報ですから、ちょっとご紹介申し上げておきます。

「管見」と京都府への登庸

薩摩軍に捕えられた山本覚馬は、ご承知のように相国寺境内の南側、現在の同志社中学校や大学の今出川キャンパスにあった薩摩屋敷に拘禁されました。拘禁とはいっても比較的自由にふるまえたようで、同じ場所に捕えられていた他の人たちは、碁を打つなどして時間をつぶしていたということであります。この拘禁中に、山本はその後の人生を大きく変えることになる「管見」を口述して、やはりそこに捕えられていた野沢鶏一という会津藩士に筆記させました。野沢は当時十七歳だったそうです（前掲、宮崎論文）。山本は四十一歳でした。野沢はのちにイェール大学で法律を学びまして、神戸地方裁判所の判事や東京銀座の公証人などを歴任したようです。

「管見」の内容にまでふれる時間はございませんが、要するにそれは国際状勢をにらみ、また欧米の先進諸国の文化に範をもとめながら、今後の日本がとるべき施策を二十二項目にわたってあげ、各項目について簡潔な説明を付したものであります。山本は薩摩藩主に会って直接進言したかったらしいのですが、会見の希望がいれられ

新島　襄

なかったので、文書にして差し出したわけです。慶応四年三月か五月ころとみられます。国内で戦って消耗しているばあいじゃない、という考えが根底にあったのはいうまでもございません。彼は当時としては稀な国際通でありました。蘭学の造詣が深かったとはいえ、実に驚くべきことであります。

薩摩藩の要人たちがこの「管見」をどう受けとめたかは詳らかでありませんが、これによって山本覚馬に注目した最初の人は、河田佐久馬であったと思われます。河田はおそらく「管見」の写本を見たのでしょう。同志社大学図書館にも、久徴という人が明治二年六月に筆写したものが保存されておりますが、これは慶応四年八月に栗原只一が借りて写したものを底本にしていますから、「管見」の写本は二、三にとどまらなかったと見てよろしいでしょう。

河田という人物は、明治三年正月に兵部大丞から京都府大参事兼留守判官に転任していまして、槇村正直権大参事の上席です。この河田が京都府の産業振興策を立案する際に、山本覚馬を物産引立会所（勧業場の前身）へ招いて知恵をかりているのです。山本の登庸以前であります。河田はまもなく他へ転出いたしまして、振興策は槇村に引き継がれます。そして明治三年七月に長谷信篤府知事らの承認をえて、右大臣三条実美に差し出され、その認可をえました（『京都の歴史』第八巻）。

山本覚馬が登庸されるのは、槇村が河田から仕事を引き継いだころで、おそらく河田の推薦であろうと思うのです。明治三年三月二十八日（陽暦四月二十八日）に、京都府は兵部省を通して「山本覚馬登庸伺」を大政官に差し出しました。登庸理由は、府下に山本ほど海外事情に詳しい者はいないから、というのでありました。大政官の弁官から内諾があったのは同年四月十四日（陽暦五月十四日）であります。正式の認許は二年後の明治五年

一月二十八日付になっております。おそらく山本の言動を見ていたのでしょう。辞令には「当府出仕中十等官員之取扱申付候事／但四人口ニ月給三十円」とその待遇についても記されています。

山本については存命中から京都府顧問といわれていますが、それは正式の職名ではなく、嘱託の勧業御用掛というようなものであったと思われます。しかし嘱託とはいえ、実質的には勧業つまり産業振興に関する顧問であったとみてよろしいでしょう。

産業振興策の策定だの山本の登庸などといったことがなされましたのは、明治維新以降の急激な変動によりまして、西陣を中心とする京都の産業が著しく衰微したからであります。東京遷都の問題もからみまして、京都市中は暴動がおきかねないような状況にありました。そこで京都府としては東京の新政府から財政的援助もうけながら、なにをおいてもまず産業を復興して、奈良の二の舞になるのではないかという府民の危惧をとり除き、動揺を鎮めねばならなかったのであります。

山本覚馬

山本が登庸されましてからは、産業振興策は着実に実現します。伏見の鉄工所(伏水製作所)、梅津製紙場、市中の化学工業試験場、試験農場、織殿、染殿、病院、牧畜場などがそうであります。机上のプランを実施に移す設備や手順、技術的な問題にまでは通じていなかった山本は、かねてから知り合いであったドイツ人技師カール・レーマン、ルードルフ・レーマン兄弟を京都府に斡旋しまして、明治三年十一月に雇入れに成功しました。この兄弟の働きがなかったならば、京都の産業振興策ひいては近代化施策の具体化は遅れていたにちがいないのです。勧業場の課長として敏腕をふるう明石博高の雇入れ(明治三年十月)についても、山本が一枚加わっております。こうして、明治五年に第一回京都博覧会を開催して、製品を展示していることからも、産業の近代化が

いかに速やかであったかがうかがえるのであります。

山本覚馬の教育施策

産業の面において、その識見とアイデアをフルに活かした山本は、京都の教育施策の上でも、その拡充と近代化に大きく貢献しております。

彼は会津にいたとき、藩校の日新館に反対を押し切って蘭学所を設け、自ら教授をつとめた人でありますが、京都へ出て参りましてからも蘭学と英学の洋学所を開きまして、会津藩士のみならず、洋学を志す諸藩の藩士に開放しました。もちろん幕末のことであります。その学校の存続期間や規模は詳らかでございませんが、位置は会津守護職屋敷にちかい上京区西洞院上長者町上ルで、寺の広間を借りてのものでありました。

明治二年に薩摩屋敷から解放された彼は、「その識見を買われ、軍務官で諸人の教授などをつとめ」（原田久美子「山本覚馬」）たといわれています。京都府に登庸される前であります。そのこととの関係は明確でないのですが、自宅に講義所のようなものを開きまして、政治や経済を講義しました。おそらく京都府に登庸される前後からだと思われます。ここで教えを受けた人たちの中に、浜岡光哲、田中源太郎、中村栄助、雨森菊太郎、垂水新太郎ら、京都の新時代の政財界を担う人たちがいたのです。この人たちがいわゆる山本人脈を形成いたしますとともに、新島襄のよき協力者になるわけであります。

山本人脈と新島のかかわりあいにつきましては、また後で多少申し上げたいと思いますが、明治三年十一月には、木屋町二条の角倉屋敷に洋学所ドイツ学校が設けられます。教授は先のルードルフ・レーマンで、英・仏・蘭・独語のほか数学を教えました。この学校の生徒が三〇〇人を超えるようになると、ルードルフの友人であるアメリカ人チャールス・ボードウィンが教師として雇用されております。ドイツ学校の人気のほどが想像できます。

翌十二月には府中学が開設され、さらに明治四年十月には、府中学の一分校としてフランス学校が河原町通二条下ルに設けられるのです。この学校の教授はフランス人のレオン・ジュリーで、語学、医術、ケミストリイ、地理学のほか諸種の職業を教えました。このジュリーが、西陣の職人を技術研修にフランスのリヨンへ派遣する斡旋の労をとることになります。

こうした学校の設立はすべて山本覚馬の手になるものだとはいえないでしょう。産業の近代化もそうでありま

す。しかし、山本のアイデアと進言によるものであることは、おそらく確かでしょう。と申しますのは、山本はすでに「管見」の中の「学校」の項で次ぎのように述べているのです。

「我国ヲシテ外国ト并立文明ノ政事ニ至ラシムルハ方今ノ急務ナレバ、先ヅ人材ヲ教育スベシ、依テ京摂其外於津港学校ヲ設ケ、博覧強記ノ人ヲ置キ、無用ノ古書ヲ廃止シ、国家有用ノ書ヲ習慣セシムベシ、学種有四、其一建国術性法国論表記経済学等モ亦其中ナリ、万国公法ノ如キハ、其二修身成徳学、其三訴訟聴断、其四格物窮理其他海陸軍ニ付テノ学術ヲ教諭セシムベシ、(当時之ニ医学ヲ加ヘ五種トセリ)」

「管見」は日本が国際的な観点からみて著しく遅れているのだという問題意識に、立論の根拠を置いている、といってよろしいと思います。教育施策にも顕著にそれがうかがえます。「無用ノ古書ヲ廃止シ」というのは、その後に述べられている五種の学問分野から考えて、四書五経すなわち漢学であろうと考えられます。

「我国ヲシテ外国ト并立文明ノ政治ニ至ラシムル」ことが現在の急務であり、それにはまず「人材ヲ教育」することが先決問題だという観点から、学校あるいは教育について説くのです。山本にとっては、古い知識大系や教育理念によって育てられた「人材」では、とても「外国ト并立文明」の国をつくることは望めないわけでありますから、外国人教師から直接洋学教育がなされるような学校の設立をはかろうとして、なんら不思議はございません。

山本の教育施策はそれだけではありませんでした。明治五年四月に丸太町川端西南の広大な九条邸を利用して開設される新英学校女紅場が、やはり山本の発意によるものであろうと考えられます。この学校は当初、維新後生活のよりどころを失っていた公家や武家の娘を対象にして、新時代の女性の教養と職業を身につけさせようとしたようですが、徐々に一般家庭の娘さんたちにも門戸が開かれるようになりました。開校時の入学者は七十八名で、府中学の入学者よりも多かったようです。この学校がのちに京都府立第一高等女学校となり、鴨沂高等学校になります。現在その跡には「女紅場跡」という碑が建っているのをご存知の方も多いでしょう。この女紅場の規則第一条には、次のようにうたわれておりました。

「婦女子ト雖モ其才其器、学テ大成スヘキ者ハ専ラ一技一術ヲ習熟セシメ、人ノ教導トナリ国家ノ用ニ供スルアリ。或ハ啻ニ通義ヲ知ラシメ、博ク女工ニ渉リ女事ヲ治メテ一家ノ良婦タラン事ヲ要スル者アリ。故ニ学内外ヲ

兼ネ諸種ノ課業ヲ設ル」

「女紅」と「女工」は同じ意味でありまして、女性のやる手芸のことです。

この目的条項を読みまして思いうかべますのが、山本覚馬が「管見」に一項をもうけている「女学」であります。次のように述べられています。

「国家ヲ治ムルハ人材ニヨルモノナレバ是ヲ育スルハ緊要ナリ。日本支那ハ婦人ニ学問ヲ教ヘズ、自今以後男子ト同ジク学バスベシ。夫婦トモ精神十分ノ智ヲ尽スモノナレバ其子親ニ優リ又其子モ親ニ優リ、追々俊傑ノ生ルハ其理也。童子ハ婦人ト関スルコト多ケレバ、婦人賢ニシテ教ユルト愚此を育ツルトハ其相違甚シ。夫女ハ生質沈密ノ者ナレバ其性ニカナフ学術、国体ニ関ハル物ヲ撰ビ教ユベシ、且才女ハ猶ホ学バスベシ」

女紅場規則第一条と山本覚馬の「女学」では、観点の置き方に違いが認められますけれども、女性を女性だからという理由で差別しないで、国家有用の人物を育てるべきだとし、才能ある女性にはさらにその才能を開花せしめるよう教育すべきだとしている点などに、相通じるものが認められます。彼は明らかに朱子学などによる封建道徳を否定しておりますし、当時こうした女子教育論をもっていたのは、少なくとも京都には山本をおいて他にいなかったでしょう。

さらに興味ぶかいのは、この学校に彼の妹の八重が権舎長兼教導試補（明治八年十月、新島襄と婚約したことにより解雇）として教鞭をとっており、同じ会津若松出身の蘆田鳴尾という女性が重要な役割をはたしていることであります（蘆田は開校二～三年後には一等舎長兼礼法主任教授に昇格）。この学校に開校当初からこうした教員がいたということは、山本覚馬と学校の結びつきがうかがえるといってよろしいでしょう。開校の翌年、明治六年には、英学教授としてイギリス人のアーネスト・ウエットン夫妻が採用されています。新島襄も最初に京都を訪れたとき、この学校を見学していまして、英語のテキストを見て「よくそんなむつかしい本を習っているな」といって驚いたと、八重の『回想録』にございます。

山本覚馬と新島襄の出会い

大変に大雑把な概観でありますが、山本覚馬という人物の識見の一端と、京都府における地位、役割がご理解いただけたかと思います。その山本と新島襄の出会いでありますが、山本は新島に会う前に、おなじアメリカン・ボードの宣教師であるO・H・ギューリックやJ・C・

ベリーらに会っていたようです。明治五年第一回京都博覧会のときで、博覧会の会期中は外国人も自由に京都へ旅行ができたのです。このときは、会ったといっても、おそらく儀礼的なものであったと思われますが、山本という人物は、先のレーマン兄弟にせよウエットンらにせよ、外国人に接して学びうるものは学ぼうという姿勢というか、知的好奇心をもっている人であったと想像されます。

ついで明治八年の四月初めころ、博覧会見物と保養を兼ねて夫婦で京都を訪れた宣教医のM・L・ゴードンの訪問を受けまして、『天道溯原』という書物を贈られます。

これは大変有名な話でありますから詳しくご説明申し上げる必要はなかろうと思います。贈られた本はW・A・P・マーチンの著 *Evidences of Christianity* の漢訳で、日本語に訳すとすれば『キリスト教の証拠』とすべきでしょうか。山本は早速これを人を雇って読んでもらいました。そして強い感銘を受けます。その後まもなく彼を訪ねてきた新島に、この本によってキリスト教に出会うまでの精神の遍歴を語ってから、「わたしにも明け方の光がさしてきた。今やわたしには、以前には全くわからないでいた道が見える。これこそは長い間、無意識のうちにわたしが探し求めてきたものなのである」（『新島襄全集』第十巻―この巻はA・S・ハーディーの著 *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* を北垣宗治名誉教授が翻訳したもの）と、山本はいったというのです。このことは *Missionary Herald* の一八七五（明治八）年十月号にも「新島襄からの手紙」という表題で掲載されております。たぶん『天道溯原』を読んだ後だと思われますが、山本は妹の八重にマタイ伝を読んでもらったりしたようです。八重は木屋町の宿へゴードンを訪ねて、聖書を教えてもらっております。ここで新島を見かけたのです。

山本の「管見」の中に「変仏法」という一項があります。この中で彼は、日本は小国なのに寺院が四十五万軒もあり、おびただしい数の僧侶がいる。しかし彼らのうち「法ヲ弁ヘ戒ヲ守ルモノ千人ノ内一人、悪行セザル者百人ニ壱人」、「古ノ僧ハ愚民ヲ教諭シ善ニ導キシが、今ハ徒ニ仏像ヲ擁シテ墳墓ヲ守ルノミニテ世ニ益ナキハ推テシルベシ」と痛烈に批判しています。そして、これらの僧に「語学算術手跡等ヲ始トシテ惣テ実学ヲナサシメ」て、寺を小学校にすべきだと、排仏毀釈運動に通じるような、極めてラジカルな提言をしているのです。

儒教に対してもそうでありましたが、山本は仏教に対してもなんら執着するところがないのです。今後の日本

にとって有益か否かが判断の基準になっています。彼は合理主義者でありプラグマチストなんです。もちろん開明主義です。欧米先進諸国の宗教であるキリスト教に共鳴いたしますのも、おそらくそのことと無関係ではあるまいと私は考えます。

こうした山本覚馬に新島襄が初めて会いますのは、明治八年四月上旬であります。この年の一月二十二日大阪へ着いた新島は、川口居留地のゴードンの家に同居しておりました。そのゴードンが夫妻で京都へ出掛け、しばらく滞在することになった四月早々、見物に来てみないかといった手紙を新島に送った可能性があります。新島はのんびりと奈良、宇治、比叡山などをまわって京都へ入りました。そして博覧会のほかあちこち見物に歩いております。なにしろ生まれて初めての京都でありますから、見たいところが少なからずあったでしょう。彼は滞在中に、槇村正直権知事や山本覚馬に会いました。

槇村はご承知のように、木戸孝允の懐刀といわれた敏腕の政治家でありまして、明治元年に不穏な動きがある京都へ新政府から派遣されていました。木戸孝允と新島は、新島がアンドーヴァー神学校に在学中、ワシントンで何度も会っています。木戸は岩倉全権大使一行の副使だったのです。木戸はそのとき、新島の印象などをごく簡単にではありますが日記に何度か書いていまして、新島を信頼するにいたっていた事実をうかがわせます。

帰国した新島が大阪に滞在していましたとき、新政府の長老である木戸孝允も会議などがあって大阪へ参りました。新島は早速、大阪にキリスト教主義の学校をつくる許可がえられるよう、木戸に渡辺知事への斡旋を依頼します。しかし、外国人宣教師がキリスト教を教える学校だということで、知事はつよい難色を示しました。

そのあと、木戸は京都へ足をのばしております。明治八年二月中旬だと思われます。そのころの「木戸日記」によりますと、彼は槇村を訪ねたが留守で会えず、ついで山本覚馬に会っています。二月十九日のことであります。大阪では新島の期待に添えなかったので、新島襄という英学校をつくりたがっている男がいる、キリスト教徒だが、本場仕込みの新しい知識をもっているし信頼できる人物でもあるから、一度会ってやってほしいと斡旋した可能性はありうるでしょう。少なくとも槇村と新島の会見が、木戸の全く関与するところでなかったとは考えがたいように思われます。新島から海外の事情や文化についてきいた槇村は、ただちに新島に博物館用掛を委嘱するのです。

ついで新島は山本に会います。そのとき山本から『天

道溯原』の話が出たことは先にちょっと申し上げました。それ以上の詳しい話の内容は明らかでないのですが、大阪へ帰った新島が、四月二十七日付で、アーモスト大学の恩師であるJ・H・シーリー先生にあてて書いた手紙（『新島襄全集』第六巻、所収）の一節が、私には非常に興味ぶかいのであります。この手紙は奈良、宇治、京都などを旅行したことの報告が主たる内容なんですが、その中に次のように記されています。

I was persuaded by one of the prominent men in that place to bring my future College there instead of having it in Osaka. I may do so if we could get permission to teach Christianity opeuly.

prominent men というのは、このパラグラフの前後の文脈からみて山本覚馬とみて間違いございません。その山本から大阪よりもこの地にそのカレッジをつくるようpersuadedされた、つまり懇請された。あるいは説得されたと新島は記しており、さらに続けて、もしキリスト教を公然と教えることが許されるなら、それに応じるかもしれません、と書いているわけです。これで二人の話の内容があるていど推測できます。

新島は山本のもとめに応じて、欧米の事情や文化についてはもちろん教育制度についても話をした。すると山本は、あなたが大阪につくろうとしているその学校は、ぜひ京都につくりなさいと新島に説きつけたのです。私は残念ながら英語に自信がございませんが、“persuaded”というのはおそらく、たんに希望をのべたとか、従来定説のようになっている協力を山本が申し出たなどというようなものではないと思うのです。山本はおそらく、土地はわたしが提供する、というような話までしたと想像してよろしいでしょう。A・S・ハーディーは「四月になって新島が京都の知事に彼の計画を披瀝した時には、山本がその案に暖かい支持を与えたのであった。」（『新島襄全集』第十巻）と書いていますが、これには二、三重要な誤解があります。

山本の申し出をきいた新島は、「もしキリスト教が公然と教えられるならば」それに応じるかもしれないと書いているのですから、山本はキリスト教については、自分としては大いに歓迎する。しかしむずかしい問題もあるので、それを教えることが出来るよう精一杯努力しましょう、といった約束をしたものと思われます。でなければ、新島にとって京都は考慮の余地のない土地であったはずでありまして、山本の努力に望みをつないでいたのだと私はみるわけであります。

私の想像は少し飛躍しすぎかもしれません。しかし、

京都府に登庸されて以後の山本覚馬の産業と教育の両面にわたる近代化施策をみますならば、新島襄がつくりたいと願っている英学校を京都につくらせようとして新島を説得することは、なんら不自然ではございません。その学校は外国人が直接教える本格的な英学校である上に、京都府はなんら財政的負担を要しないのですから、願ったりかなったりであります。今日ふうにいえば英学校の誘致です。問題は一にかかって、キリスト教をどうするかであります。

京都に英学校設立の過程

京都見物くらいのつもりで出掛けたにちがいない新島にとって、山本覚馬の懇請は思いがけない土産でありました。キリスト教が教えられる学校にできるかどうかは、山本覚馬に期待するとしまして、もう一つの大問題は、新島自身がその一員であるアメリカン・ボードの宣教師団から、京都へ学校をつくることの諒解をえることであります。

新島が大阪へ参りました直後に、神戸からJ・D・デイヴィスがやって参りまして、ゴードンと三人で学校設立の用地を見に大阪の川口居留地の外へ出掛けています。そのときデイヴィスは新島に、「良いトレーニング・スクールをもたなければ、優秀な若者を全て失ってしまうだろう」と語ったと、一月二十五日付のアメリカン・ボード総主事N・G・クラーク宛の手紙に新島は書いています。トレーニング・スクールというのは牧師・伝道師養成所のことでありまして、当時の条約の関係で日本国内の旅行に厳しい制約がある上に、言葉も不自由であった宣教師たちにとりましては、彼らの手足になってくれる日本人の伝道師を早急に養成する必要がありました。ですからトレーニング・スクールの開設しか念頭になかったわけであります。しかもそれを設ける場所は、神戸か大阪の居留地の近くであることを望んでいました。ところが新島は、そうした宣教師団とは学校に対する考え方を異にして参ります。おそらくA・ハーディー宛とみられる手紙に、彼は次のように書いているのであります。

「〔伝道者の〕養成所に加えて大学をつくるのでなければ、私たちの仕事がうまくいくはずがないと確信します。私はこの前のボードの集まりでこのことをお願いしました。しかし宣教師団はあの資金を養成所だけに使いたがっています。私としては宣教師諸君がわが青年たちの知識に対する激しい欲求を満足させるためならどのような

科目でも教えて下さる、ということであるなら、その案に喜んで賛成したいと思います。もし神学と聖書だけを教えるというのであれば、日本の最良の若者たちは私たちのところから逃げていくでしょう。彼らは近代科学をも欲しているのです」

A・S・ハーディーの『新島襄の生涯』（『新島襄全集』第十巻）からの引用でありまして、井上勝也教授が最近出版された『新島襄―人と思想』にも紹介されております。

手紙にいう「あの資金」というのは、ラットランドでのアメリカン・ボード第六十五回年会の席で寄付の申し出をえた五千ドルであります。

この文面は、先にご紹介いたしましたデイヴィスの言葉と全く対照的でありまして、「神学と聖書」しか教えない学校ならば、「日本の最良の若者たち」は逃げて行くだろう。彼らは「近代科学」をも学びたいという「激しい欲求」をもっている。だから、そうした青年たちのために宣教師たちがどんな科目でも教えようというなら賛成だが、そうでなければ「日本の最良の若者たち」は集まらない。だから賛成しがたいといっているわけです。

この手紙は、一八七五（明治八）年三月に書かれたことになっております。しかし、三月というのはどうも解せないのです。と申しますのは、文中に「この前のボードの集まりでこのことをお願い」したとある「ボードの集まり」にひっかかるわけです。これは五千ドルの寄付約束を得た前年十月の年会の意味ではおそらくございません。年会の模様を報じた *Rutland Weekly Herald* (1874. 10. 15) にもそうした記事は見られないのです。おそらくこの集まりは、明治八年五月二十四日に大阪で開かれた宣教師の会か、同年五月二十六日から六月七日にかけて神戸で開催されたジャパン・ミッションの年会であります。ということは、京都で山本覚馬に説得されてから二ヵ月たらず後のことであります。ですから、「神学と聖書」だけでなく、「近代科学」をも教える学校にしなければ優秀な若者たちが集まらないという考え方には、山本の意見も入っているとみてよろしいでしょう。

新島も日本人でありますから、日本の青年たちのニーズ、というよりはむしろ日本にとって必要なものがなんであるかに無知、無関心であったはずはございません。しかし、私は、明治八年十月の *Missionary Herald* に掲載されている新島の長文の手紙の、次の一節を看過するわけにいかないのです。彼は次のようにのべております。

「私は京都の〔槇村〕副知事および彼の顧問〔山本〕と親しくなりました。私はキリスト教と近代科学が教えら

れるべき英学校を設立することを望んでおりました。当時彼らは、私が近代科学を教えることを強く切望しておりましたが、キリスト教に対しては幾分無関心でした」（井上勝也『新島襄―人と思想』）

彼らもキリスト教が国民を純化し、道徳水準を引き上げる唯一の手段であることをある程度まで認めてはいた、と新島はつづけています。

山本覚馬も京都府の一員であり、また彼の関心のもち方から考えてみましても、近代科学を教える英学校であることを望んだはずであります。しかし、新島はアメリカン・ボードの一員であるだけでなく彼の使命感からも、キリスト教を抜きの英学校ならつくる必要はありません。さらに、彼がアーモスト大学で学びました自然科学は、自然神学でありましたし、欧米の伝統ある大学は、キリスト教と密接な関係のもとに教育がなされている事実を山本に説いたでしょう。

そこで、京都府に受け入れてもらいやすくするためにも、表面的には近代科学を教える英学校の体裁にする。その近代科学とあわせてキリスト教も教えられる学校にする、という合意が、山本と新島の間にあったとみてよろしいだろうと、私は考えるのであります。明治八年八月に京都府に差し出すことになる「私塾開業願」に記された授業科目表からもそういわざるをえません。約二十科目掲げている中で神学や聖書に関する科目は「聖教」のみです。これも認可の条件として削除され、「修身学」にかえられることになります。

明治八年四月の初対面の際に、ほぼ以上のようなことが話合われたものと、私は想像しております。少し具体的すぎるようですが、そうした話がなかったとしたら、新島は宣教師団を説得すべくもなかったはずであります。神戸でのジャパン・ミッションの年会で、新島はようやく京都に学校をつくることに同意を得ますが、それ以後の経過をみましても、宣教師団は積極的に賛成したというわけではなかったでしょう。居留地外にトレーニング・スクールを設けることは、大阪では不可能であることがはっきりしていましたから、宣教師団にも代案がなくてしぶしぶ承認したものと思われます。

それはともかく、ジャパン・ミッション年会の最終日の六月七日、新島はデイヴィスと二人で山本覚馬を訪問します。これは山本の懇請に対する回答のためであるとともに、ミッションの代表者としてデイヴィスが山本の真意を確かめ、また実地を検分するためでもあったでしょう。二人は山本から譲渡の約束があった薩摩藩邸跡を見に行っているのです。その結果について、デイヴィス

は次のようにアメリカン・ボードの本部へ報告しました。

「京都府の顧問であり、ミッションの友人である盲目の山本氏が、真理に強い興味を抱くようになり、京都が福音に開かれることをとくに望んでいます。彼と新島氏の影響によって、副知事も興味を抱いており、私達はこの秋そこに Training school を開設することをおそらく許されるでしょう」（井上勝也『新島襄―人と思想』）

これは *Missionary Herald* の一八七五年十月号に掲載されているデイヴィスの報告書の一部でありまして、彼も山本の懇請を受け入れた、ということはジャパン・ミッションが同意したということであります。ただし、デイヴィスも Training school の開設については希望的推測をのべるにとどめております。近代科学を教えるだけの学校なら、宣教師団は京都を断念しなければなりません。しかしデイヴィスは、山本覚馬を信頼するというかたちで、ゴー・サインを送ったわけです。

新島やデイヴィスら宣教師たちとちがって、山本覚馬という人物は容易ならぬ政治家であり策士であります。それまでの京都における彼の地位と実績がなによりの証拠であります。京都に本格的な英学校を誘致しようとする山本は、その英学校と抱き合わせになっているキリスト教の問題を解決する腹案をもっていたはずであります。そうでなければ新島やデイヴィスに対して、キリスト教への共感を語りながら英学校をつくるよう説得することはなかったでしょう。

同志社英学校とキリスト教

山本覚馬に京都へ学校をつくる約束をした新島は、デイヴィスとともに一度大阪へ帰ります。六月末に大阪を引き払って京都へやってきますと、十月までの三ヵ月余、山本の家に同居して学校設立準備に奔走します。同居はもちろん山本の勧めによることでありましょうし、どんな相談だってすることができます。山本宅同居人ということで、新島には種々便宜も得られたにちがいないのです。もし彼が旅館住いでしたら、府庁の役人などの応対の仕方がちがったでしょう。山本はいわば新島の後見人なんです。かつてのハーディーの存在に似ています。

八月に提出した「開業願」は、京都の仏教徒の反対運動などで認可通知が容易に得られず、新島は急遽東上して、岩倉全権大使に随行していたことでワシントン以来の顔なじみである政府の要人に直接折衝したりしなければならなかったことは、よくしられていることであります。「開業願」と申しましても、普通の英学校などとちが

いまして、デイヴィス教師雇入れ願いが抱き合わせになっている。というよりも、これが難問であることはご説明申し上げるまでもございません。「開業願」に彼の経歴がどう書かれていようと、日本へ伝道にきているキリスト教の宣教師であることくらい、神戸へ連絡をとれば簡単にわかったはずです。

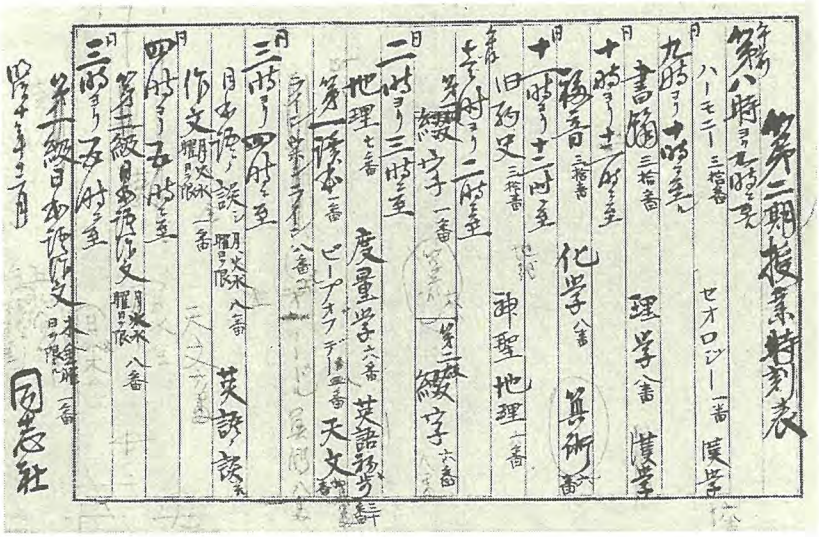
新島の直接折衝などの結果、ようやく十一月になって京都府を通じて開業に関する通知がありました。ご承知のように、キリスト教を正課では教えないことを条件とするものであります。近代科学だけを教える学校なら許可しようというわけです。新島はその条件をのみましたので、宣教師団から激しい非難をこうむりました。デイヴィスさえも、家族を連れて神戸へ帰ろうかと迷わざるをえなかったのであります。

従来、正課ではキリスト教を教えないという条件を新島が受け入れるという局面で、山本覚馬との関係が問題にされることはございませんでした。記録が残っていないからでもありますが、ごく常識的に考えてみまして、京都府が山本覚馬には一切相談なしに、極めて重大な問題を含む通知を新島だけにするものでありましょうか。山本は明治三年以来、京都府の顧問格として数々の実績を残してきた人物であり、槇村副知事その他とは密接なつながりがあるのです。なによりも、彼は同志社の僅か二人しかいない結社人の一人なんです。京都府が無視したはずがございません。

私は開業の条件を山本が事前に知らずにいたはずはない、もっといえば、それは山本が槇村あたりと相談の上で決めた条件であったかもしれないとさえ思います。山本という人物はそれくらいのことはやるでしょう。そうでなければ、賊軍の汚名を着せられていた元会津藩士の身で、たとえ産業や教育面に限られることであったにしても、長州閥であったといってよい京都府政を動かすことなど出来るはずがございません。

その条件を受け入れるよう新島を説得したのも、おそらく山本です。新島は人の信頼を裏切るような男でなかったことはご承知のとおりでございます。その新島が一時的にもせよ宣教師団の失望をかい、非難に耐えて、同志社英学校の開業に踏み切りましたのは、山本の説得があったからだとしか考えられないのです。では、どういう説得を受けたのか。

あまりに想像が飛躍しますと皆さん方の失笑をかうどころか、不謹慎だとお叱りを受けるかもしれません。そうなりますと人文科学研究所に対しても申し訳ないんですが、ここまで想像をたくましくして参りましたので、



新島襄自筆の時間割草稿（明治 11 年 12 月）

もう引っ込みがつきません。

山本の説得は、まず課外教育をフルに生かす、ということであったでしょう。正課外に校外で生徒がキリスト教の集会をもつとか、聖書や神学の勉強をするといったことは咎めない、というのが条件の付帯事項でありました。京都にとって　これは大きな前進であります。私はこれもきっと山本が、本格的な英学校を誘致するために、その程度のことは許してやってほしいと、槇村などを納得させたことであろうと思うのです。

課外ならキリスト教を教えるとか集会をもってよいわけですから、さっそく英学校開業の朝、デイヴィス教師も出席して新島の仮寓で開校礼拝がおこなわれます。なぜ仮校舎として借りた高松邸で礼拝がなされなかったのかと、私は以前不思議でならなかったのですが、高松邸は校舎であり、開校といえば当然市民の注目が集まります。だから礼拝は自宅で守ったのです。

また、この日、結社人の山本覚馬が顔を出していないらしいのは、彼の立場上からでもありましょうし、学校とは一線を画していたほうが、以後の京都府との対応がしやすかったからでもあるでしょう。

開業後、新島とデイヴィスの家では安息日が守られ、生徒のみでなく市民も出席するようになります。そして

開業の翌年、明治九年九月には相国寺門前に専用校舎二棟が竣工すると同時に、新島は個人名義で校門前の豆腐屋の古家を買って聖書教場にします。さらに十一月から十二月にかけて、ラーネッド宅、新島宅、ドーン宅にそれぞれ教会が設けられるのです。

私は豆腐屋の廃屋を買い入れた例の「三十番教室」は、案外、隠れ蓑だったかもしれないと勘繰っております。と申しますのは、あの建物の二階（一階は生徒控室）には一室しかないのです。そこで確かに聖書の授業がなされていたことは、京都府学務課員による「同志社視察報告」（『同志社百年史―資料編一』）にも明らかだし、徳富蘆花も『黒い眼と茶色の目』にかいています。しかし、あの一室だけで十分であったとは考えられません。

明治九年九月には、熊本洋学校の卒業生または上級生を受け入れまして神学専門課程である余科が設けられます。その余科に学んだ者はだれ一人、三十番教室が教場だったとは語っておりません。蘆花は讃美歌を習ったとも書いていますが、その教場も三十番ではないようです。

そのことと関連して不思議に思われますことは、明治十八年の「英学校概則」に「聖書」が「随意課目」として授業科目表に掲げられるようになるまでは、聖書や神学は科目表にございません。にもかかわらず徳富蘇峰の自伝や、私が編集しました『創設期の同志社』その他の回想記には、聖書や神学を学んだことが具体的に記されています。しかも新島、デイヴィス、ラーネッド、ゴードンなど、何人かの先生から学んでいます。普通科の一年生から五年生までと余科の聖書や神学に関する授業が、すべて課外であり、教場は三十番教室に限定されていたとしたら、とても出来そうなことではないのです。しかも明治十三年ころから速成神学コース、ついで邦語神学科が加わります。

私はおそらく、府庁へ提出する英学校規則や、生徒募集を目的に印刷頒布する広告などと、実際におこなう授業科目とは違っていた、つまり、少なくとも神学や聖書に関する授業科目は、外部へ出す書類には表記されていないけれども、正課に教室でやっていたと思うのです。新島襄自筆の明治十一年十二月と十二年一月の時間割草稿が残っていますが（何学年用かは不明）、これには「ハーモニー」「セオロジー」「書翰」「福音」「旧約史」「神聖地理」などが、「化学」や「算術」「綴字」などと並んで明記されているのです（前ページの写真参照）。これが実施された時間割で、こういう科目がなければ、宣教師団の協力も得られなかったでしょう。課外の聖書教場三十番教室とか、聖書や神学は課外に希望者だけに教えると

いうのは、表向きのたてまえであった。そう考えないと辻褄があわないのであります。

少し想像過剰気味でありますが、以上申し上げましたいわば世俗的な知恵は、新島の知恵ではないし宣教師たちの知恵でもなくて、キリスト教を排除しないで本格的な英学校を誘致しようとした山本覚馬の知恵だと思うのです。そうした腹案、つまり、名ではなく実において、キリスト教教育をおこなう学校たらしめようとする腹案を、新島やデイヴィスを説得した時点から山本はもっていたものと考えられるのであります。

時間の関係であとは結論だけを申し上げますが、その山本から教えを受けた浜岡光哲や中村栄助らが、開業当初から積極的に新島に協力しますのは、同志社は山本の事業だという認識が彼らにあったからではないか。少なくとも当初はそうであったにちがいないのです。

明治十年十二月に、山本は同志社との関係からだと思われますが、「御用之無当府出仕差免候事」という三行半のような辞令をもって京都府を解雇されます。しかし、十二年三月に京都府議会が開設されると、上京から議員に当選して初代議長になり、山本の指揮によって田中源太郎らいわゆる山本人脈が、槇村知事を地方税問題で糾弾するのです。

明治十四年に着任する第三代京都府知事の北垣国道は、その山本の人脈に支えられて疎水事業を完成します。そして北垣知事と山本の人脈が、新島襄の大学設立運動を支えるのであります。

山本覚馬を座標軸にして同志社の設立と創業期の歴史を眺めると、こういう見方もできなくはないという、多少大胆な試論を申し上げたつもりでございます。

長時間にわたってご清聴いただきまして、有難うございました。（一九九〇年六月十三日　大学神学館礼拝堂にて）